



「情熱」は、それを囲む人々の心を熱く染め、そのエネルギーは波紋のように次々と広がり、伝わっていくものである。

ここで述べるには、この美術館の発案者にして現在の大日本インキ化学相談役(前社長)、美術館館長の川村勝巳氏と、彼の中学時代の同級生で70年来の友人、当美術館の設計者である海老原一郎の二人の〈熱き心〉についてである。

川村氏の「創造」に対する深い思い入れは、社訓にある「進取」の精神の体現であり、50年余りにわたる全国の大日本インキ化学施設建設時に数々のエピソードを残し、私ども海老原建築設計事務所の長い歴史の多くを埋めるに充分なものであり、そしてそれは今も進行中なのである。

今回の美術館建設では、設計時の定例会議にも時おり顔を出され、その設計段階を確認しつつ、われわれスタッフ一同を励まされ、また現場の進行状態を楽しみにされて何度も足を運ばれ、その都度鋭い造形的提案や職人へのねぎらいの言葉もいただき、その〈熱き心〉の波及効果は、現実のパワーとなって人々の心をうち、ひとつのプロジェクトを大きく前へと進めたのである。

そして、オープン後1年近くになる現在もお、その運営をいかにグレードアップするかが日々の関心事となっております。

一方、海老原の〈美〉へのあくなき追求は、彼の内奥にひそむ魂の〈性〉を感じさせるものであり、日常の設計活動においてはテリケートで弱々しく、言葉巧みでもない、それが故にまた芸術家でもあった彼とわれわれスタッフとの闘いは苦悩の連続であったが、それはひとつの目的を果たさんがための闘いであると、われわれ自身も納得できるところであり、その苦楽の現実そのものが事務所の長い歴史を意味あるものともしていた。



当美術館建設にあたっては、このプロジェクトが川村氏のライフワークであるという認識そのものが、同時に海老原自身のライフワークともなり、これに賭ける彼の〈熱き心〉は、事務所の長い歴史のなかでも特にわれわれ所員の驚嘆するところであった。

それは寝食を忘れた情熱であった。

彼の最も幸せな日々であったに違いない。

1990年5月2日が美術館オープンの日であったが、その5日後の5月7日、海老原一郎は息を引きとった。

自室でのことだった。

彼はその前月の竣工式にも参列できず、建物の完成は写真でしか見るができなかった。自らの身体でじかに確認し、

感じ取ることができなかった。

しかし、彼の病床でのイマジネーションは色彩に満ち、空間は光に溢れ、心は現場を往き来していたに違いない。

われわれには、それがわかる。

「役者が舞台上で斃れるように、現場を歩いているときに死んじゃうのが、僕の理想なんだよ」が、彼の口癖であった。銀座の事務所近くの街路の小さな段差につまずいて、左足大腿部を骨折したのが遠因であった。

美術館竣工1年前のことである。

病院での半年、スケッチブックを枕元に置いての生活。

エントランスホールの天井装飾の進み具合や、ステンドグラスのデザインについて、何度も病室まで足を運んだことを思い出す。形と色をめぐって、実に楽しそうであった。



二人の84歳という年齢を超越した〈情熱〉が、すべての始まりであり、他のあらゆるものの上にあった。